

「宇宙劇場・冥王星の逆しゅう」

山川 晃平

「あれ？僕、こんな服持ってた、け。」

気付いたら、僕は青と緑の服を着て、ホールのセンターの特等席に座っていた。暖ろの側で毛布にくるま、ている感覚かして眠りをさそう。ウトウトしていたら声がかかった。

「こう、地球。この私、明けの明星様の席を  
開けなさい。」

ふり向くと、金ぱつでピンクのドレスを着た、

いかにも都会育ちのおじやう様が立っていた。

あわてて立ち上がり、たら、黄色い浮き輪をお腹にまいた女の子がボソボソつぶやいている。

「あんのい、大道具が燃えてますけんど、照  
明の太陽ちゃん、気を付けて下せえ。」

本当だ。さ、きから暑いと思、たら、ぶ台の  
後ろにセツトされた大道具が燃えている。ど

うしよう？オロオロしていたら、クールそう  
な女の人かホースで水を大道具にかけ始めた。

「センキュー、水星。」

赤い顔をした人が、チ<sup>ャ</sup>ツと片手を上げウインクする。

「こゝろいたしましよ、火星。」

水星と呼ばれた人がニカツと笑った。仲間いんだな。そう考えていると僕のお腹がグーと鳴った。近くにいたおじいさんに、

「この辺りにコンビニありますか？」と聞いたら、

「何をおっしゃいます、お坊ちゃん。そんな時は、この月じいの顔を召し上げられ。」

そう言つて、自分の顔をさす、で差し出してくれた。セツクリしたけど、食べられるかどうかは食べてみないと分からない。思い切つて「パクッ」と食べた。まんじゅうだ。口の途中でホロツととろける。

「うまい……」

差し出されるままに食べていく。このまんじゅうはうまい。神レベルだ。気付いたら、月じいの顔は満月から三日月に空をこいた。

「月じい、食べた後で悪いけど、大丈夫？」

「この月いい、お坊ちやまに心配していただくと、は身に余る光栄。この顔は三週間で元にもどりまする。」

月いいはい人だな、そう思、た時、

「みんな、明日は本番だ。練習するぞ!!」

ホールに火星の声かひびく。練習が始ま、た。

顔がデカくて、目がキラキラした熱血漢らし

き男が、

「なせだ。なせ俺よりタサイ天王星か、俺よ

りエライ王様の役なんだ!？」

と王様役を指差しながら言う。すると黒ブチ

のメガネをかけた男が冷たく答えた。

「ま、実力の差。てもんだな、木星君。」

二人の間に火花が飛ぶ。「まあまあ」と二人

を引きはなそうと闘に入、た火星は、火花に

ハチバチとやられてクレイターが新しく出来

てしま、た。僕も勇気を出して木星と天王星

をなだめようと闘に入、たけど、両方からポ

カボカをぐられた。あ、海が深くな、ちや、

た。つままれた山はき、と高くな、てる。海

から陸に水が上がり、デカイ湖が出来た。  
ひっかかれて元々一っただ陸地が大きく五  
つにさけてしまっただ。

その時、青白い閃光がかけぬけた。その閃  
光は次々飛んでくる。入り口に黒い影が見え  
た。すると今までだまっていた気弱そ  
うな子供が、ひざをふるわせて口を開いた。

「あ!! あなたは冥王星、惑星としてふさわし  
くない態度をとったから惑星から準惑星に落  
とされたのに、どうして分かってくれないん  
です。もう止めて下さい。」

冥王星と呼ばれた男が怒りの表情で答えた。

「だまれ、海王星。もう俺は昔の冥王星では  
ないのだ。彗星、行けっ!」

黒いマントが風になびいて、また青白い閃光  
が風を切って僕に当たった。痛い、止めて!!

恐竜が死んでしまう。火山がふん火し始めた。

雪が降りている。火星が彗星を冥王星に投げ

返したけど、悪送球で土星の浮き輪をつらぬ

いた。土星はその辺りの氷をかき集めて輪。

かを作っている。その横を太陽がウロチウロチ走り回る。ああ、もうダメだ。でも僕が超新星爆発を起こせば、みんなに迷惑をかけたしまう。その時、金星が彗星をぶつけらぬがらも歯をくいしばって冥王星に抱きついて何かをうたえていたのが見えた。彗星の攻めが止む。金星が冥王星を説得したんだ。金星は優しい顔で冥王星の手を引、張ってや、て来た。冥王星は苦笑いして落ちこみながら、みんなに謝った。物かげにかくれていた水星が出て来て、けがの手当てをしてくれた。僕が大陸の上にビルが建つていくのが見える。センターの特等席に僕はドカッと収まった。すると、すいまがおそってきた。目を開いたら、見なれたスターウオースのポスターが目に見え込んできた。部屋に帰って来たんだ。いつか火星人や木星人と交流して劇をやってみたい。そう思いながらベランダに出たら、夜の空で星がまたいた。火星のウインクを思い出して僕は片手を上げた。